

コスタリカの環境保護・地域開発運動 — ラス・ケブラダス生物学センターを訪ねて —

山岡 加奈子

コスタリカは南北アメリカ大陸の中間地点にあり、大西洋と太平洋の両方に挟まれているため、異なる大陸や大洋起源の多くの生物が集まっており、世界屈指の生物多様性を誇る。地上の全生物の5%が、四国程度の面積しかないコスタリカー国に集まり、そのほとんどが森林に生息しているという。その保護のために森林の保存が国家目標となっている。さらに、貴重な生物を開発や密漁から守るため、1955年から国立公園を指定してきた。1988年から環境を監督する官庁が、同時にエネルギー政策を監督しており（2013年2月から環境・エネルギー省となっている）、鉱物資源開発よりも環境保護を優先する国策をとっている。つまり、熱帯雨林や国立公園の近くに油田その他の鉱物資源があることがわかっていても、あえて開発せず手付かずの自然を守る方を優先する。

コスタリカは1990年代以来、エコ・ツーリズムに力を入れてきた。1980年代から積極的に行ってきた環境保護政策が実を結び、開発によって失われた森林の6割が回復され、豊かな自然を守る形で観光客を誘致する条件が整ったのである。今やコスタリカの観光サービス輸出は、米インテル社の誘致成功による電子部品輸出ほどではないものの、外貨獲得の大きな源泉となっている。コスタリカを訪れる観光客数は年々上昇の一途をたどり、1989年に37万人だった外国人観光客は、2011年には、観光目的以外の訪問を合わせると219万人

となっている。本報告では、山間部の森林の保護・回復を通じた環境保護と、農村コミュニティ開発を結びつける活動を行っているNPO団体、ラス・ケブラダス生物学センターを紹介する。

ラス・ケブラダス生物学センター（Centro Biológico “Las Quebradas”）は、コスタリカ南部のサンシドロ（Sanisidro）市郊外にある、ラス・ケブラダス村の山の中にある。筆者は2012年11月、同センター創設者の一人、ダニエル・カマチョ（Victor Daniel Camacho Monge）コスタリカ大学名誉教授の案内でここを訪問した。当日はコスタリカ大学リモン校の環境学部の学生たちが研修に来ており、彼らの研修に加えてもらう形で、半日見学させてもらった。

このセンターはNPOで1989年創設である。カマチョ教授の父君が所有されていたコーヒー農園の一部を同教授がこのセンターに寄付し、森林



センターでの講義に聞き入る国立コスタリカ大学リモン校の学生たち。



センターの登山コースの最高地点である、ソンチョ山 (Pico de Zoncho: 標高1438メートル) 頂上からの眺め。下は晴れていたのだが、上に登るとご覧の通り。右側後方にうっすらと見える集落がラス・ケブラーダス村である。

に戻す活動を始めたことが発端である。現在では、元カマチョ農園の植林は終わり、その周辺に広がる農園や牧草地を買い取り、植林を広げる活動を行うことによって、地域を流れるラ・ケブラーダ川の水資源を守り、さらに農村コミュニティ観光を振興し、地域開発をはかることを目的としている。ほかにも、環境保護を市民や若い世代に理解してもらうための教育活動を行い、農村コミュニティ観光として、エコ・ツアーやキャンプ、登山案内などの活動を有料で行っている。敷地内には宿泊施設や食堂、ランの庭園やチョウの飼育場などが点在している。

センターの運営はボランティアの理事会で決定される。理事になっているのは政府の官僚や大学の研究者などで、専任は近くに住む退職した元教師の男性1名のみである。残りの理事7名は普段は首都サンホセで働き、2カ月に1回の理事会に出席するためにラス・ケブラーダスへやってくる。政府で働く理事が多いのは、政府の認可を得るための運動を行ったり、環境保護のための新しい規制を求めたりする際に役立つようである。

また、毎年夏休みの季節には欧米の若者たちがボランティアとしてやってきて、センター周辺の整備やエコ・ツアーに必要な登山道などの建設・整備を行っているそうである。敷地内にあるラン園やチョウの飼育場あるいは庭園の池などは、これらの欧米ボランティアの若者たちが建設したそうである。とても素人仕事とは思えない出来上がりである。

筆者が見学させてもらった日の理事会では、たまたま政府がラ・ケブラーダ川から取水したいという要請が来ていて、これを環境保護の見地からどう食い止めるか、という話が議題にのぼっていた。山と森林に恵まれたコスタリカには川が多く、太平洋岸沿いに車で走ると、ほぼ数キロメートルごとに1本の川が現れるほどであるが、この豊かな水資源を農業や都市での生活用水に無規制で利用させることを、環境保護の見地から防ぎたいということである。

財源をどう獲得するかはこのNPOでも問題になると思うが、ここでももちろん理事会の議題にのぼっていた。エコ観光やキャンプ場の提供などによる収入に加え、3年前から「樹木の養子」(adoptación de árboles) 運動を始めた。これは、



センター入口近くにある事務所建物。手前は太陽光発電装置。その下に、養子にできる苗木の見本が竹筒に植えられて並んでいる。敷地内は一面芝生に覆われ、緑豊かな美しい場所である。

木の苗木1本を50米ドルで「養子」にしてもらい、それを森林に戻したい土地に植林すると同時に、新たに森林に戻す土地を買い入れる資金にするというものである。プログラムの名前は「命のための私の木 (Mi árbol para la vida)」という。苗木の種類は10種類以上あり、すべて外来ではなくこの地域原産の木が選ばれているとのことである。これらの木の植林を進めることで、開拓前の自然林に近い植物相を再現しようというわけだ。理事会では、この運動をどうやって海外に広めるかが話し合われていた。

コスタリカ大学環境学部の学生たちは、全部で50名ほどの学部生であり、カリブ海沿岸の中心であるリモン (Limón) 市にある分校に通っている。山の中に開けた盆地のサンホセ周辺で見かける白人かメスティーソの住民とは違い、アフリカ系の顔立ちあるいは先住民系の顔立ちの学生たちである。一般的には白人国家のようにいわれることが多いコスタリカの人種的多様性を感じる瞬間である。彼らの多くは卒業後、エコツーリズムのガイドになることを目指しているそうである。



筆者が参加した樹木の養子プログラム「命のための私の木」の証明書。筆者の帰国後にメールで送られてきたもの。筆者が選択したのはカオーバ (Caoba) という種類の木。成長は遅いが、硬くて家具や建築材料になると聞いて選んだ。他にも成長が速くてすぐに山を支えられるもの、美しい花を咲かせる種類などいろいろある。



ラ・ケブラーダ川。この流域ではまだ上流で川幅は狭いが、山間部を下りながら他の川と合流し、太平洋に注いでいる。

学生たちはまず1時間ほど、センター内にあるセミナー用のスペースで、理事の一人によるパワーポイントを使った講義に出席、センターの概要や目的について説明を受けた。その後、センターの後ろにそびえる標高1438メートルのソンチョ山 (Pico de Zoncho) に登りながら、山の中の珍しい植物や昆虫、鳥類などについて、専門ガイドの説明を受ける。これは彼らの授業の一環なので、皆ノートやカメラ、ビデオなどを持参して記録をとり真剣に聞いている。筆者は登るだけで精一杯だったが、まるで街中を歩いているかのように平然と登っていた男子学生の一人は、デジタルカメラでキノコ類を盛んに撮影していた。「コスタリカのキノコ類は、種類がわかっているのは全体の5%といわれているんだ。比較的簡単に新種を発見できるので、ちょっと変わったキノコを見つけたら写真に撮ることにしている」とのことであった。

ラス・ケブラーダス生物学センターのウェブサイトは以下の通りである。

<http://www.canturural.org/jos/index.php/conozca-nuestros-afiliados/29-fundacion-para-el-desarrollo-del-centro-biologico-las-quebradas>

(やまおか・かなこ／地域研究センター主任研究員)